

**立教大学学術推進特別重点資金（立教SFR）**  
**個人研究費**  
**2008年度研究成果報告書**

<b>研究代表者</b>	所属・職名	氏名
	社会学部・教授	櫻井厚印
<b>研究課題</b>	体験を語り継ぐ実践についての社会学的研究——戦後日本の経験史	
<b>研究期間</b>	2008年度	
<b>研究経費</b>	500,000円	

**研究の概要**（200～300字で記入、図・グラフは使用しないこと）

沖縄戦の体験を語り継ぐ活動の担い手を対象にライフストーリーの語りから、どのように歴史的体験が語り継がれているかを検討した。具体的には、本土からの修学旅行生に対していわゆる「平和ガイド」を実践して学生や市民、戦争体験を調査して引き継いでいる研究者、各集落の悉皆調査をとおして戦時体験の記録を集積し、陸軍病院壕の発掘と保存に取り組んできた「南風原文化センター」や「ひめゆり部隊」で有名な「ひめゆり平和祈念資料館」などの活動を対象にしている。体験世代と戦後世代、沖縄と本土という出身地、また伝える相手が地元住民なのか本土からの一般市民のかなどの差異が語り継ぐ実践のストーリー提示や表象の手法にどのように現れているか。また、体験的語りに対して語り継ぐ語りがあるような特徴を持ち、その社会的文脈のもとで構成されているか、という視点から、それぞれの実践の様式を明らかにした。

**キーワード**（研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。）

[ 戦争体験を語り継ぐ ] [ ライフストーリー ] [ 平和ガイド ]

**研究成果の概要** (図・グラフ等は使用しないこと。)

戦争体験についての当事者のライフストーリーと戦争の記憶を語り継ごうとするより若い世代のライフストーリーを、インタビュー手法によって収集することで、戦争体験を「語り継ぐ」実践における意味を明らかにしようとしてきた。

さて、本研究では、わが国で唯一、戦場となった沖縄において、戦時体験を語り継いでいる実践的な活動とその担い手を対象とした。沖縄では、さまざまな活動があるが、そのなかでも調査の対象としたのは「平和ガイド」、および、市町村レベルではたいへん精力的に語り継ぐ活動をしていると思われる「南風原町文化センター」および全国的に有名な「ひめゆり平和祈念資料館」である。また、沖縄で戦争体験を記録保存する調査のモデルとなった「浦添方式」の中心人物の社会学者、石原昌家氏の調査方法論も検討した。

平和ガイドとは、主に本土からの修学旅行生や希望する一般の旅行者を対象に、沖縄における沖縄戦の戦跡巡りや戦時体験を語り伝える役割を担って人たちのことである。その設立の経緯から、いくつかの団体が存在する。そのひとつが「沖縄県観光ボランティアガイド友の会」であり、その担い手には数人、幼少期に戦争を体験した人もいる。そうした語りは、単なる戦時の悲惨ではなく戦前から今日へ至る沖縄がおかれてきた状況をふまえないと理解できないものがあり、本土と沖縄の差異という大きな対立軸が語りには含まれていることがあきらかになった。こうした視点とはまったく異なる若者の平和ガイドの活動の一つ、沖縄国際大学の学生による平和ガイド・サークル(スマイライフ)は歴史も浅く、まだ2年余りの活動歴しかないが本土出身学生も参加し、自らが身近な米軍基地の存在や沖縄の特異な問題に気づいていく過程が、そのまま平和ガイド活動の基礎になっている。平和ガイドの語りは、彼らが現在の彼らの日常と関連づけることによって組み立てられており、なによりも修学旅行生とコミュニケーションをはかることに主眼をおいていることが特徴である。

一般的に、語り継ぐ実践の代表格として資料館や博物館などの活動があげられる。本調査では、沖縄でも精力的に戦時体験を記録し、戦争遺跡の保存と展示にも熱意を注いでいる南風原町の「南風原文化センター」と「ひめゆり祈念資料館」を取り上げている。「南風原文化センター」には地元の人を中心にさまざまな見学者や相談者が来館し、同時にその人たちが情報提供者になって世代を超えて語り継がれる場所となっている。また、4年に1回開催される町民劇場の平和創造劇では、戦後世代が戦争を追体験する機会となり、子どもや若者はアートをとおして戦争を受け取るだけでなく伝える側にもなる。世代を超え、異なる文化との交流も活発で、ローカルな文化全体のなかで戦争を位置づけている点で特異な活動となっている。また、子どもたちには他の市町村の子どもたちとの平和学習の交流などの活発な交流機会が街独自で提供されている。また、南風原町内には、ひめゆり学徒が看護補助要員として動員された沖縄陸軍病院南風原壕群が存在し、町は独自に「文化財指定」をし、保存に力を入れるとともに町民を中心にガイドを養成し見学者への便宜をはかっている。ここにも、町行政が町民と一体となって戦争を語り継ごうとする意思と独自の方針を見て取ることができる。そこから明らかになったのは、次の2点である。ひとつは、語り継ぐ実践で重視しているのは、主に上記にも述べたさまざまな立場の人の交流を促進し、体験者のみならず、語り継がれる側が語り継ぐ側にも転換できるような構図である。もうひとつは、事実を伝えることよりも現在の時点でそれぞれがどのようなストーリーを作り上げて当時の歴史解釈をしているかを積極的に評価していることである。戦争をアートで表現したり、体験を聞いて子どもたちにもアート表現を指導したりのも、そうした活動の一つである。もはや語り部の紋切り型の語りではなく、いまの人たちの感性を研ぐ試みとして興味を引く。

また「ひめゆり平和祈念資料館」は2004年のリニューアル・オープンで「次世代プロジェクト」を立ち上げ、まさしく若い世代への戦争体験を語り継ぐために(a)展示リニューアル、(b)証言映像の記録化、(c)後継者の育成、を方針にした。生存者が確実に減少するなかで「戦争体験を若い世代に確実に伝える」ためであることを、主任学芸員も説明している。

※ この(様式2)に記入の、成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

**研究成果の概要** (つづき)

あらためて研究成果をまとめれば、以下の3点に整理できる。

① 沖縄国際大学の学生による平和ガイド・サークル(スマイライフ)の活動を紹介するとともに、創立メンバーおよび現役メンバーへのインタビューから、彼/彼女らが戦争をどう受け止め、何を伝えようとしているのか検討する。このサークルに集う若者は、笑顔で生きられることこそを平和と捉えており、日常と断絶したところに戦争を置くのではなく、両者を連続線上に位置づけようとする試みを見出せる。メンバーたちはこうした認識に立って、自分とほぼ同世代の中高生を相手にガイドを行っている。こうした実践のなかに、戦争体験者の実感やメンタリティを共有することが難しい若い世代が、遠い過去の出来事としてではなく戦争に向き合っていくことの可能性を見出した。戦争を語り継ぐ実践をとおして、日常の中にその経験を生かしている姿が浮き彫りになった。体験世代とは異なる「平和観」「戦争観」がうかがわれた。(石川良子)

② 沖縄戦の実相解明やアジア太平洋戦争後の沖縄社会にまつわるさまざまな問題に一貫して取り組んできた石原昌家氏の研究をレビューしながら、オーラルヒストリーの可能性を探った。代表的な沖縄戦争史家である石原氏の30年以上にも及ぶこれまでの取り組みは、家永教科書裁判や靖国問題など政治闘争の文脈に対応しつつも、調査方法や対象者との出会い、対象者との関係性、語りの妥当性など、オーラルヒストリー研究のなかで議論になりやすいトピックの実践例として読み解くことも可能である。多くの著作と石原氏へインタビューをおこない、そのデータを相互に参照しながら、それらの内実を明らかにするとともに、語り継ぐ主体としての石原氏のスタンスを明らかにしようとした。とくに、「事実」と「真実」の違いに力点をおく石原氏の調査方法論を批判的に検討した。(八木良広)

③ 沖縄戦の体験や遺品などを町内の各地区から精力的に収集し、陸軍病院壕の保存もおこなっている「南風原町文化センター」および、全国的によく知られた「ひめゆり平和祈念資料館」の二つの施設を中心に、関係者へのインタビューをもとに戦争体験の表象や沖縄戦体験を語り継ぐ実践の内容を紹介するとともに、その相違をあきらかにした。「南風原文化センター」では、遺品の展示においては、比較的ポピュラーにおこなわれている一元的なストーリーによる展示方法とは異なり、むしろ見学者のアクティブな解釈を促すことを期待するところに、沖縄戦を「歴史化」するのではなく「現在化」する試みがうかがえる。同時にローカルな文化が、かならずしも事実を言語化する方法とは異なる表象(作品、演劇など)の理解を可能にしている。また「ひめゆり平和祈念資料館」では、体験者自身の語りが確実に少なくなるなかで、若い世代が語り継ぐ役割を担っており、「証言員」から「説明員」への役割交代がみられる。また、資料館のリニューアルとともに歴史的事実を正確に伝える展示方法をとるようになった。これは、「ひめゆり祈念資料館」が戦争を知らない世代が全国から訪れる施設であることが、大きな理由である。いかに戦争体験を語り継ぐのかは大きな課題になりつつあるが、こうした活動事例をさらに詳細に調査することによって、戦争体験の表象のあり方を考えたい。(桜井厚)